A.イギリスの産業革命とヨーロパの工業化

1.イギリスの産業革命：イギリスの産業革命は 1760 年代から 1830 年代にかけてイギリスで起こり、これを契機にヨーロパへと工業化が進展していった。世界で最初に起こったことから「古典的産業革命」と呼ばれる。比較的長い間で起こったものがなぜ革命と言われるのかは、トインビー博士やフランスのマントウが書物の中で過去の「革命」に匹敵する一大社会変化を生じさせるものであると述べている。イギリスで産業革命が起こった要因として以下のものが挙げられる。原料調達地や市場として植民地の存在、清教徒革命や名誉革命による社会経済的な環境整備、蓄積された資本や資金調達が容易な環境、および農業革命による労働力の増加などがある。フランスと異なったのは植民地の有無であった。

(1)イギリス産業革命の起る条件：イギリスでは毛織物が中心であった。そのため農地を牧羊地に転換し、各地に農村工業都市ができていった。海上の覇者となったイギリスは貿易相手国に毛織物は売れず、綿織物に人気があった。そのため、インド産の綿織物の販売から、自前の綿製品の生産へ切り替えていき、原料の綿花を輸入し、綿製品に加工して輸出するようになり、インド製品に対抗し得る安価な綿製品の大量生産が必要となった。

(2)イギリス産業革命の発展：イギリスの綿工業の歴史的経過・技術革新は下記のとおりである。1732 年 J.Kay の飛び杼（織布作業機）の発明。1764 年 J.Hargreaves がジェニー紡績機を発明し、綿織物生産が飛躍的に向上する。1768 年 R.Arkwrite が水力紡績機を発明。1779 年 S.Crompton がミュール紡績機を発明。

1785 年 E.Cartwright が力織機を発明。1794 年アメリカの E.Whitney が綿繰機を実用化することにより大量の綿花の供給が可能になる。綿工業の発展の結果、イギリス・ランカシア綿工業は輸入していたインドへ輸出できるまでになり、ランカシアは産業革命の発祥地になった。

繊維業と並んでイギリス産業革命の要因となるのが鉄工業である。16 世紀頃から鉄製品の需要が高まっていたが輸入する状態であった。1769 年に A.Derby によりコークスによる溶鉱炉を発明し、実用化に成功した。更に 1789 年 H.Court が圧延法、攪拌法を発明し大量の銑鉄生産が可能となった。1806 年までには生産量が増大し、世界に輸出するまでになった。1840 年代、イギリスでは工業機械や鉄道建設ブームを迎え、さらに鉄の需要が増していった。このような鉄工業、機械、鉄道建設の発展の基を支えたのはスコットランド技師や起業家の活躍がある。「イギリスの産業革命はスコットランド人の革命」と言われるほど成果を上げた。スコットランドはヨーロッパに友好国を作り交流を持っていたため、ヨーロッパの各地へ技術と知識を持って出ていきヨーロッパの産業革命に大きく貢献していった。

２．ヨーロッパの工業化：イギリスの産業革命の影響を受けてヨーロッパの工業化は、それぞれの国の状況によって進展していった。

⑴フランス：フランスの綿工業においては、イギリスの産業革命に影響され極めて早く対応し、絶対王政のもと特権マニュファクチャ形態で企業化されていった。絶対王政からの資本援助や大領主、金融家、問屋商人からの巨額な投資により数年でイギリスに劣らぬ大規模工場に成長した。鉄工業・機械工業についても軍事目的で大規模に進展した。特に 1840 年代の鉄道建設ブームが鉄工業と機械工業を飛躍的に発展させた。

⑵ドイツ：ドイツは地形的に 17 世紀以来各種の争いに巻き込まれ、政治的経済的に疲弊していた。国内が分裂し、特権商人が商業を独占するなど統一するまでには時間を要した。そのためイギリスの産業革命から一歩遅れた立場にあった。それが試行錯誤の時間の無駄を省き新しい社会制度を導入し、急成長を遂げる要因となった。ドイツ綿工業は 1820 年代イギリスから蒸気機関・紡績機械を導入し 1840 年には大半が機械工業化していた。しかし機械化が本格化したのは 19 世紀後半となる。鉄工業においても 1850 年代以降、工業化の時代となる。ドイツにおいても鉄工業を発展させた要因はドイツ鉄道建設であった。1850 年まではイギリスからの輸入であったが 1860 年には鉄製品が輸出に転じた。ドイツの鉄工業の発展が、19 世紀後半のドイツ産業の推進役となり、重工業を特徴とする経済発展を遂げていくことになる。

以上のように、イギリス産業革命はヨーロッパにそして世界に大きく影響を与え工業化を発展させた。反面、将来に大きな環境問題を引き起こす起点ともなった。　　以上　(C)